

先週私たちは、パウロが自分を殺そうとしたユダヤ人たちに対して弁明するのを見ました。彼はその中で、自分は、主によって異邦人たちに遣わされた、と言いましたが、それを聞いた人々は、「こんなやつは生かしておくべきではない」と言って、彼を再び襲おうとしたのです。幸い、パウロは、千人隊長と兵士たちによって助けられますが、それも束の間、今度は、この千人隊長によってむち打ちを命じられます。パウロをして、彼がユダヤ人たちに訴えられている理由を取り調べるためでした。

ところが、そこでパウロがローマ市民であることが明らかになります。それによって、むち打ちはなくなるわけですが、今度は、ユダヤの議会の前にパウロは立たされることになるのです。その続きが、今日の所です。先週も触れましたが、もう一度、この議会について簡単に説明しておきたいと思います。このユダヤの議会とは、サンヘドリンといって、ユダヤ民族の内政をつかさどる機関として、紀元前二百年頃にできたそうです。大祭司がその議長で、議会は70人の議員から成り立っていました。その勢力としては、大祭司側につくサドカイ派の多数党と、律法学者たちの大半が所属するパリサイ派の強力な少数党とに二分されていたようです。

1節にあるように、この議会の前に立たされたパウロは、これまで自分が全くきよい良心をもって、神様の前に生活して来たことを述べます。すると、大祭司アナニヤが、そばに立っている者たちに、彼の口を打てと命じるのです。もちろん、パウロとしては、真実を語ったままで、それで打たれそうになったわけですから、黙っているわけにはいきません。3節「ああ、白く塗った壁。神があなたを打たれる。あなたは、律法に従って私をさばく座に着きながら、律法にそむいて、私を打てと命じるのですか」。

この「白く塗った壁」とは、崩れそうな壁に、外側から白いしっくいを塗って、一時的に保護することから、外見はよく見えても、内部に危険をはらんでいることを意味していました。ですから、パウロとしては、被告を打つには、まず律法に従ってさばきを行わないといけないのに、自分の感情的な判断で「打て」と命じたアナニヤに対して、彼が神様も律法も無視する者であるという非難を込めて、このように語ったと思われます。すると、そばに立っている者たちがこう言いました。「あなたは神の大祭司をののしるのか」。

パウロは、この言葉を聞いて、5節で「彼が大祭司だとは知らなかった。確かにみことばにあなたの指導者を悪く言ってはいけない」と答えますが、ここにはいくつか解釈があるとされています。その一つは、パウロは目が悪かったので、また、この裁判が正式なものではないために、アナニヤが大祭司の服を着ていなかったのも、彼が大祭司であるとは本当に知らなかった、というものです。パウロが、それを知って、みことばから「あなたの指導者を悪く言ってはいけない」と語ったのも、そういうところからであったと考えられます。

でも、私個人は、これはアナニヤに対する皮肉を込めた発言、という説を信じています。というのも、このアナニヤという人は、紀元48-58年まで大祭司でしたが、非常に傲慢で威張っていたと伝えられています。確かに、この時のパウロの言葉に対する彼の応答を見ても、彼が神様と律法を重んじていた人のように思えない。むしろ、その地位に就くことで、自分を権威のある何者かのように考えていたような印象を受けます。

議会の始まりが、このようなものであったというところから、まともな裁判は期待できない、とパウロは判断したのでしょう。ここでは、前回のような順序立てた証ではなく、一言、彼はこう叫ぶのです。6節の鍵括弧のところ、「兄弟たち。私はパリサイ人であり、パリサイ人の子です。私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです」。パウロは、なぜこのように言ったのか？それは、そのすぐ前に書かれているように、この議会の一部がサドカイ派で、一部がパリサイ人であるのを彼が見て取ったからです。このパウロの言葉が、議会の中で、その二派の間に意見の衝突を起こさせます。そして議会は二つに割れるのです。

なぜそのような衝突が起こったのか？8節「サドカイ人は、復活はなく、御使いも霊もないと言い、パリサイ人は、どちらもあると言っていたからである」。「復活がない」ということは、「今の世だけ」、つまり、「この世がすべて」ということです。ですから、この世でどう生きるか、どれだけ良い暮らしをするかがその中心となってきます。すると、神様を中心とした生き方は当然できなくなるのです。しかも、彼らは、「御使いも霊もない」というのですから、神様を信じていない、と結論付けても言い過ぎではないと思います。一方

のパリサイ派の人たちは、それらを信じていましたから、パウロが「死者の復活という望み」と言った時、彼らの間で激しい論争が起こったのです。

そして、その騒ぎはいよいよ大きくなります。すると、パリサイ派のある律法学者たちが立ち上がり、激しく論じてこう言いました。9節「私たちは、この人に何の悪い点も見いださない。もしかしたら、霊か御使いかが、彼に語りかけたのかもしれない」。この彼らの言葉も、サドカイ派の人たちに対する皮肉とも取れますが、このようにパリサイ派の律法学者たちがパウロを擁護することで、論争は、激しさを増すのです。それがどれほどのものであったかは、この後、千人隊長が、兵士たちに命じた内容からわかります。

10節「論争がますます激しくなったので、千人隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと心配し、兵隊に、下に降りて行って、パウロを彼らの中から力づくで引き出し、兵營に連れて来るように命じた」。皆さんは、これまでに心が引き裂かれるような思いをされたことがあると思います。では、その中で、どれだけの人が、文字通り、自分の体が引き裂かれるような経験をおもちですか？ここでパウロは、激しく論じ合う両方の人々から引っ張られたのでしょう。または、そうされる寸前だったのかも知れません。ですから、それを見て心配した千人隊長は、力づくで彼をその中から引き出すよう、兵士たちに命じるのです。この議会がいかに混乱状態に陥ったかがわかります。でもパウロは、ここでも助け出されるのです。

皆さん、いかがですか？もしあなたが、このような経験をしたら、どうなると思いますか？パウロは、このような中を一度だけでなく、何度も通らされたわけですが、それでも精神的に健康な状態を保てると思いますか？恐れや不安から気が変になっても、おかしくないのではないのでしょうか？この後、パウロはどうなりますか？ここには、彼が落ち込んだとか、恐れに満ちた、といった表現は出てきません。でも、続く11節を見ると、主が、彼のそばに立ち、御声をもって彼を励ましておられるのです。

11節「その夜、主がパウロのそばに立って、『勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない』と言われた」。なぜ主は、パウロのそばに立ち、「勇気を出しなさい」と言われたのでしょうか？普通に考えて、「勇気を出しなさい」とは、勇気のない人に語る言葉です。私たちは、勇気のある人に、「勇気を出しなさい」とは言いません。ということは、パウロはこの時、勇気をもてずにいたのです。それを恐れとって良いかはわかりませんが、何らかの形で、彼の心は沈んでいたと思われまます。それゆえに、主は、彼のそばに立ち、直接彼に語られるのです。

でも、勇気を出す理由を告げることなく、ただ「勇気を出しなさい」というだけでは、説得力はありません。何の動機づけもなく、ただそういうだけでは、がんばれない人に「がんばって!」、落ち込んでいる人に、「元気になって!」というのと同じです。そこには理由、動機づけが必要なのです。主は、「勇気を出しなさい」と言われた後、こうおっしゃいました。「あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない」。

以前主は、御霊によって、パウロにエルサレム行きとその後、ローマに行くことをその願いとして与えられましたが、このエルサレムで、これまで彼が通ってきたことを考えるなら、その実現は、非常に難しく思えます。ローマに行く前に、彼は殺されてしまうのでは？と思えるようなことが、次から次へと彼の身に起こっていました。事実、この後、40人以上のユダヤ人たちが、パウロを殺すまでは飲み食いしないと誓い合い、殺害計画を進めようとするのです。

そのような中で、主が彼のそばに立ち、彼にローマ行きを約束されることで、だから「勇気を出しなさい」と語られたことは、非常に大きな力添えでありました。パウロをして、この後も、すべての人に対し、彼の見たこと、聞いたことを証するには、つまり、主イエスを証するには、このような主からの励ましと約束が必要だったのです。実は、主がこのようにして、パウロに現れ、彼に語られたのは、少なくとも4回目といえます。

最初は、彼の回心の時（使徒9章）、次に、彼がエルサレムで祈っている時（使徒22:17-18）、主は「わたしはあなたを異邦人に遣わす」と彼に告げられました。その後、コリントでは幻を通して、主が「恐れずに語り続けなさい」と命じられることで、パウロはそこで1年半、腰を据えてみことばを語り続けたのです。そし

て、今日のところでは、群衆と指導者たちに殺されそうになるといったギリギリの所を通らされる中で、主は、彼にローマ行きとそこでのあかしを約束されました。ですから、主は、救い、召命、使命の追認、使命達成のための約束という、節目節目の際に、パウロに現れ、直接語られることで彼を導かれたのです。

皆さん、主イエスはそのようなお方です。私たちをして、この世で主の証人として歩むことは決して容易なことではありません。黙示録で記されているように、主から吐き出されることを覚悟で、生ぬるいクリスチャンとして生きるのなら、いくらでも妥協の道、楽な道はあります。でも、主に対して忠実な者、天の御国を継ぐことを願うなら、苦しみや試練は避けられないのです。でも、「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」（ヘブ 13:5）とみことばをもって約束して下さっている主は、パウロのそばに立たれたように、ご自分がいのちを捨てるほどに愛する者たちのそばに立ち、御声をもって語って下さるのです。

いかがですか？皆さんの中には、主がそばに立っておられるのを、その目で見たとはいないと思います。また、主の肉声を聞いたという人もいないでしょう。むしろ、試練や苦しみの中を歩いている時に、多くの人がいうのは、主が隠れておられるよう、遠くにおられるように感じられるということです。私もそのような経験をこれまで何度もしてきました。でも、私たちがそのように思うとか感じるということで、実際に主は私たちを離れ、見捨てられたのか？という、そうではないのです。

パウロは、1コリ 15章31節でこう言っています。「私にとって、毎日が死の連続です」と。皆さん、あなたにとって、毎日は死の連続ですか？パウロは、主の御名のため、主を証することのために、日々自分に死んでいました。それゆえに、彼のうちで死者の復活、つまり、死よりよみがえられた主イエスだけが望みとなったのです。私たちが死者の復活に望みを置くのは、いつですか？どのような時に、そのことに思いを寄せ、そこに望みを置こうとしますか？それは死を意識する時です。それが誰か愛する者の死であれ、自分自身の死であれ、死を意識する時に、私たちはそれに打ち勝つ力、復活に望みを置こうとするのです。

では、あなたにとって毎日が死の連続ですか？主に生かされるために、あなたは日々主のもとに、つまり、その十字架のもとに行き、自分の死を覚えていますか？主に生かされるために、自分の死を覚えない人にとって、主がそばに立ち、御声を語って下さることに、何の意味があるのでしょうか？それを求めない人が、試練や困難の中で、主に求めることが、果たして、主がともにおられ、みことばの約束をもって自分を力づけて下さるというものになりますか？むしろ、そういう人は、「こうして下さい。あれを下さい」と、主から何かしてもらおうこと、主に何かもらうことをその求めの中心とするのではないのでしょうか？

主は、ご自分を探す者に、ご自身を現わして下さいます。その御声を聴くことを求める者に、みことばをもって語って下さるのです。なぜそうなんですか？主は、そのために来て下さったからです。父なる神様がどういう方かを私たち罪人にわからせて下さるため、つまり、さばきではなく赦しを、滅びではなく永遠のいのちを与えることを御心としておられることを証するために、主はこの世に来て下さいました。そして、私たちの罪を背負うことで、十字架にかかり、私たちに対する神のさばきをご自分が代わりに受けて下さったのです。また三日目に死者の中からよみがえられることで、ご自分を信じるすべての者に、主は永遠のいのちを約束しておられます。そのようにして、大きな代価をもって私たちを救い出して下さった方が、私たちをして、主の救いとすばらしさを証する歩みにおいて、聖霊を通してそばにいて下さらないこと、みことばの約束をもって語り、力づけて下さらないことがあるのでしょうか？私たちはこのお方を求めていこうではありませんか。